

島根県立邇摩高等学校 平成二十八年度卒業式 校長 式辞

長かった冬もようやく終わりに近づき、穏やかな陽射しのなかで仁心の庭の木々も一気に芽吹きを始め、日本海より吹く風にも確かな春の香りを感じる頃となりました。

本日、平成28年度島根県立邇摩高等学校の卒業式を挙げるに当たり、

大田市教育委員会教育部長 田中 純一 様

卒業生会 松風会会長 大島 淳 様

P T A会長 橋田 正義 様をはじめ

多数のご来賓の皆様のご臨席と保護者各位の御列席を賜って厳粛のうちにも心温まる卒業式を執り行うことができますことは、教職員一同の大きな喜びであります。高い所からではありませんが、皆様に心からお礼申し上げます。

さて、高等学校の全課程を修了し、ただいま卒業証書を授与いたしました89名の卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。また、今日の良き日を迎えるにあたり、お子様を陰に日向にと支えていただきました保護者の皆様には、お喜びも一入のこととご拝察申し上げます。お子様のご卒業、誠におめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

卒業生の皆さんは、三年前、この式場で入学許可を受けて以来、総合学科という本校独自の教育課程の中で、じっくりと時間をかけて、自分がどんな分野で働きたいのか、働くためにはどんな力を身につけなければならないのか？その身に付けた知識・技術をどの様に地域で役に立てるかを学びました。この邇摩高校で過ごした3年間は、皆さん一人一人にとってかけがえない、また思い出深い年月であったと思います。

緊張した入学式、初めての友達・新しい担任の先生、優しく頼もしい上級生との出会い、初めての対面式は新鮮で、輝く未来を予感させるものでありました。出雲養護学校邇摩分教室の皆さんと共に創造した学校行事・共同学習では支え合うことの大切さを学びました。先輩・後輩と共に自分の可能性に挑戦した部活動、総合学科としての学びを通して地域課題の解決を図

る邇摩高フェアでは、多くの来場者の皆様に足を運んで頂き沢山の「ありがとう」と笑顔を頂き、学びの原動力となりました。「私は今後、一期一会を大切に生活したいです。フェアで沢山の方々に来場頂いて多くの方と触れ合うことができ良い経験となりました。感謝の気持ちを忘れずに生活して行きたい」と語る皆さん。また、学校の活性化を生徒が提案する邇摩高サミットにおいて、地域の伝統文化である石見神楽を継承するために部の創設を願い出た皆さん。

思いを伝えることの大切さや、支え合うことの大切さを学んだ3年間でありました。一人一人の卒業生が自分の可能性に、果敢に挑み数々の足跡を残してくれました。正にこれらの教育活動の成果は、新しい邇摩高校の伝統を創造し、それが爽やかで温かい風となり邇摩高校を吹き抜けた意義深い三年間でありました。

本校は皆さんが入学する前年から邇摩高校の更なる魅力化にむけて、地域活性化の一翼を担う人材の育成を目指して「島根県立邇摩高等学校活性化プラン」を掲げ取り組んできました。また、国道沿いに掲げる「叶えられる夢はきつとここにある」の大看板、70インチ電子黒板やタブレットを始めとするICT機器の導入による教育環境の整備を、本校PTA・卒業生会からの厚いご援助を頂き行ってきました。こうして学校とPTA・卒業生会が一体となり本校魅力化に取り組んだ結果もあって、今年度新たに大田市に県立高等学校支援連携協議会が立ち上がりました。支援策を議論する中で「大田の子供たちは大田で育てる」との理念のもと島根県・大田市から今後、持続可能な本校の魅力化に向けての支援をいただくこととなり邇摩高校は新たなステージに移行することとなりました。

私から新しい世界に旅立つ皆さんへ一つだけ贈りものをします。

一編の物語をこれから紹介させていただきます。

タイトルは「縁を生かす」です

その先生が五年生の担任になった時、一人、服装が不潔でだらしく、どうしても好きになれない少年がいた。中間記録には少年の悪いところばかり記入するようになっていた。ある時、少年の一年生からの記録が目にとまった。「朗らかで、友達が好きで、人にも親切。勉強もよくでき、将来が楽しみ」とある。間違えだ。他の子の記録に違いない。先生はそう思っ

た。二年生になると「母親が病気で世話をしなければならず、時々遅刻する」と書かれていた。

三年生では「母親の病気が悪くなり、疲れていて、教室で居眠りする」三年生の後半の記録には「母親が死亡。希望を失い、悲しんでいる」とあり、四年生になると「父は生きる意欲を失い、アルコール依存症となり、子供に暴力を振るう」先生の胸に激しい痛みが走った。だめだと決めつけていた子が突然、深い悲しみを生きている生身の人間として自分の前に立ち現われてきたのだ。先生にとって目を開かれた瞬間であった。放課後、先生は少年に声をかけた。「先生は夕方まで教室で仕事するから、あなたも勉強していかない？わからないところは教えてあげるから」少年は初めて笑顔を見せた。それから毎日、少年は教室の自分の机で予習復習を熱心に続けた。授業で少年が初めて手を上げた時、先生に大きな喜びが沸き起こった。少年は自信を持ち始めていた。

クリスマスの午後だった。少年が小さな包みを先生の胸に押し付けてきた。後で開けて見ると、香水の瓶だった。亡くなったお母さんが使っていたものに違いない。先生はその一滴をつけ、夕暮れに少年の家を訪ねた。「ああ、お母さんの匂い！今日は素敵なクリスマスだ」六年生では先生は少年の担任ではなくなった。卒業の時、先生に少年から一枚のカードが届いた。

「先生は僕のお母さんのようです。そして、今までに出会った中で一番素晴らしい先生でした」それから六年。またカードが届いた。「明日は高校の卒業式です。僕は五年生で先生に担任をしてもらって、とても幸せでした。おかげで奨学金をもらって医学部に進学することが出来ます」十年を経て、またカードがきた。「そこには先生と出会えたことへの感謝と 父に叩かれた体験があるから 患者の痛みがわかる医師になるとするされ、こう締めくくられていた」「僕はよく五年生の時の先生を思い出します。あのままだめになってしまう僕を救ってくださった先生を、神様のように感じます。大人になり、医者になった僕にとって最高の先生は、五年生の時に担任をしてくださった先生です」そして一年。届いたカードは結婚式の招待状だった。「母の席に座ってください」と一行、書き添えられていた。
以上です。

たった一年間の担任の先生との縁。その縁に少年は無限の光を見出し、それをよりどころとして、それからの人生を生きま

した。ここにこの少年の素晴らしさがあります。人は誰でも無数の縁の中に生きています。無数の縁に育まれ人は、その人生を开花させていきます。よく縁を大切にと言えば「一期一会」という言葉を思い浮かべる人もいると思います。この少年がたった一年の縁を大切にしたように、この学び舎で皆さんと先輩・後輩・教え導いてくれた先生方で共に紡ぎ織りなした三年間は、正に縁を生かすことが大きなテーマであったと気づくはずです。だからこそ今日という日に改めて感謝し、悔いのない一日としなければならないのです。人は一人では生きてはいけない、互いに支え合って生きています。毎日の生活で不平や不満で心を暗くする前に、縁のあったことを謙虚に喜び合い、その喜びの心で、誠意と熱意をもって、お互いの繋がりをさらに強めていってほしいと願っています。そこから混沌とした世の中を変えるぐらいの、力強いエネルギーが生まれてくるのだと確信しています。

それではいよいよお別れです。皆さんが高校時代に抱き、育んできた「夢」が必ずや将来実現していくことを、そして自ら描いた「夢」を、強い信念と飽くなき継続に裏打ちされた「志」に進化させ、各々の人生において花開かせていくことを私は願っています。そして、君たちがこの3年間の邇摩高校の生活の中で、また多くの優しさに溢れる大田市仁摩町での生活で抱いた「誰かの役に立ちたい」、「地域の役に立ちたい」、「地域に恩返しをしたい」との健気で純粋な想いをいつまでも持ち続け、形あるものにしてほしいと願っています。そのうえで、出来ることならばこの学舎で過ごした多くの者たちが、いつの日にか心のふるさとであるこの仁万の地に「志を果たしに」、或いは「志を果たして」帰らんことを心から願っています。

出航（旅立ち）の時が来ました。最後にもう一度、校舎とこの美しい風景を目に焼き付けて、そして国道9号線に掲げている大看板の、「叶えられる夢はきっとここにある」の文字をしっかりと胸に刻み込んで、新たな世界に旅立って行ってほしいと思います。最後になりましたが、「89名の卒業生の一人一人の大いなる未来に幸多かれ」と心より祈り、式辞といたします。

平成29年3月1日
島根県立邇摩高等学校長
三島 一友